

## ① 福祉のプロは地域資源と本人を結ぶパイプ役、 インクルージョンを実現させよう!

明石洋子 ◎全日本手をつなぐ育成会評議員・NPO法人サポートセンターあおぞらの街理事長



徹之に障害があると判った時、「徹之は諦めて、弟の教育に専念しよう」と主人は落胆し、孫の将来を案じた私の父は「阿蘇の自然の中に牧場（施設）を作ろう」と言うてくれました。施設を紹介して下さった方からは「なまじ親元でわがままいっばいに育つと施設の集団生活に支障が起こる」とさえ言われました。

でも徹之を施設に入れると、家族が笑顔で明るく暮らせないような気がしました。確かに時間的なゆとりができ、弟の教育や徹之と一緒にできなかった多くの楽しみ（外食や映画や旅行等）ができるでしょう。しかし徹之が今日何を喜び、何を悲しんだか分からない別の場所で生活をしていると思うと、徹之を欠いた家族のどんな楽しみも刹那的で、心から楽しめないように思えました。

重度の知的障害と自閉症の徹之であっても、私が若くて元気なうちは、専門家のアドバイスをもらいながら自分の手で育てたいと思いました。

\*

「徹之と共に地域で」と決めた以上、こだわりを自立のスキルの獲得に、超多動は隣人との関係づくりと、苦しい時は発想の転換をして、能力が100（普通児）でないと意味がないという価値観を捨て、「たとえ50しか発達しなくても、不足の50は周りが理解し、工夫し、支援すれば自立は可能」と思うようにしました。

実際、私は、クラスメートや地域の人びとと共に、彼の興味や特性を見つけては、発達の手立てを工夫し、充実感を共有し、おかげで彼は多くの支援を受け、NHKの番組のタイトル通り「笑顔で街に暮らす」ことができました。

当時（20年前）の福祉は、「障害があるから特別な場所で訓練し、障害が治らないから特別な場所で生活する、それが障害者にとって当たり前」で、親も「それが我が子の幸せ」と信じ、施設作りの運動をしてきたわけですが、幸せの青い鳥は施設の中でなく身近にいたので

す。

それに気付かされた私は、彼の豊かな人生を保証するために、資源や支援の豊富な街の中に、地域作業所やグループホームを作りました。そして今「施設福祉から地域福祉へ」この改革を追い風に、「個々にあった、必要な支援を受け、一生涯安心して暮らせる街」にするため、「サポートセンターあおぞらの街」をしっかりと地域に根づかせたいと思っています。

\*

親を始め支援者の仕事は、地域で生き生きと活動できる場を広げ、選択肢をできるだけ多く作ること。自己決定は多くの選択肢があってこそ本物ですね。地域資源を活用するため、今、施設にいるプロは地域に出て、そのパイプ役をしましょう。障害児を抱えた親も本人も安心して地域生活が送れる、そのためのサービス提供がこれからの福祉です。地域にインクルードされたら（20年後は）、施設の建物などは不必要かもしれませんね。